すべての親子が幸せに 社会援助を

フランスの子ども福祉政策を研究
安發明子さん

パリ在住で、フランスの子ども福祉政策を研究する日本学術振興会特別研究員の安發明子さん（41）＝鹿児島県出身＝は、出産や子育てのさまざまな段階でソーシャルワーク（社会福祉援助）が充実する仏の取り組みを日本に紹介している。仏では、慈恵病院（熊本市西区）が取り組む困難を抱える妊婦が匿名で出産する制度も古くから浸透。安發さんは「すべての子どもが幸せに育つ社会を目指すことで、より良い未来につながる」と話す。

インタビューに答える安發明子さん。本年度は出身地の鹿児島とパリを行き来し、福祉制度の研究に取り組む＝5月、鹿児島市加治屋町

深掘りトーク

―なぜ仏の福祉をテーマにしたのですか。

「大学卒業後、横浜の福祉事務所で生活保護家庭を支援するケースワーカーをしていました。どの家庭も親の病気や障害などの困難に直面しているが、家事・育児の支援やケアなどの十分な支えがなく、ハンディとなって子どもの育ちを直撃していました。子どもにとって、平等にチャンスがある社会ではないと感じた」

「幼い頃スイスで育ち、欧州の福祉を知りました。中でも仏のワーカーたちは、子どもたちの福祉を充実させるために『制度が全ての人に行き届く』ことを目標に奮闘していることに強くひかれました」

―仏の福祉の特徴を教えてください。

「どんな環境に生まれても、子どもたちの権利を守ろうとしている点です。産科や保健所、保育や学校現場にはソーシャルワーカーら専門職が配置されています。私自身パリで出産したのですが、産科のワーカーから『日本人同士の夫婦なら孤立リスクがある。家事育児を支えるサービスが利用できる』と言われ、驚きました。身体面だけでなく、心理面や社会的な状況を確認する妊娠初期面談が義務付けられています」

「学校の健康診断でも、子どもの学習の遅れや心の健康も確認し、親の相談や申請を待つことなく支援につなげ、状況が改善するまでフォローします。子どもが月に2回以上学校を休むと、家庭丸ごとの支援が始まり、不調の兆候があれば国家資格のエデュケーターと呼ばれるワーカーが家庭に入る。日本で問題になっている子どもの不登校や自殺は、かなり早期から対応しようとしています。子育てを親任せにするのではなく、専門職が子の育ちを保障し、親も支える考え方。親は子どもが育つ『環境』と考えられています」

―なぜソーシャルワークを重視するのでしょう。

「日本も仏も、福祉の枠組みや目指しているものは大体同じです。違いは、福祉を一人一人に実現しようとする目標設定と、それを支える側の人の動き。仏では困難を抱える親子に『頑張れ』と言うのではなく、その親と子がそれぞれ望む生き方を一緒に模索する。親の健康問題や職場の人間関係、親子関係など、それらがあって力を発揮できない人はたくさんいます。悩みを本人の優先順位順に解決していくと、余裕ができる。親は自分がしたかった子育て、自分が子ども時代にしてほしかった子育てを、実現できるようになっていく」

―社会保障に関わる人手や費用もかかりそうです。

「国民が健康で幸せであれば、より良い未来になる。そのための予防が大事です。問題が起きてからの福祉ではなく、全員を対象とし予防する。仏の保健省は、親子関係が悪化して保護が必要になる状況に比べると、支援にかかるコストは9千分の1で済むとしています。また心理トラブルや成長の遅れは、挽回にとても長い時間がかかることも分かっています」

―仏には200年前から、妊娠に戸惑う女性が匿名のまま病院で出産できる制度があります。

「仏では無料で妊婦健診や出産ができ、子どもの教育費も大学院までほぼ無料です。経済的な事情は問題にならず、親への家事・育児の支援もある。それでも匿名出産を希望する親が年間500人ほどいます。母親が自分の親との心理的断絶などを経験していたり、ケアが不十分でわが子を迎えられない心理状況であることが多い」

「子どもが健康に生まれ、女性も安全に出産できる環境が絶対に必要なのは言うまでもない。匿名で生まれた子どもには、幼少期から心理面のケアが都度あり、思春期の親子関係の変化を乗り越えるカウンセリングなどを通し、重荷を抱えたまま成長することを防ぎます。妊婦が匿名、無料で相談できる場所も複数あり、即日保護を受けられる。女性もケアを受けられることが重要。出自に関する情報は国が保管し、母子双方に配慮して伝える工夫をしています」

―5月末に熊本市と慈恵病院が共同設置した子どもの「出自を知る権利」を議論する検討会の委員に就きました。

「誰もが生まれた子どもに幸せになってほしいと願います。すべての人が幸せに暮らせる社会を皆でつくることを目指し、提言していきたい」

あわ・あきこ　1981年生まれ、鹿児島県出身。2005年一橋大社会学部卒。05～07年、横浜市職員として生活保護担当。11年に渡仏。17年、仏国立社会科学高等研究院健康社会政策学修士、18年社会学修士。7月に「フランスの子どもの育ちと家族」（かもがわ出版）を刊行予定。

水俣市の児童家庭支援センターを視察する安發明子さん（左）＝4月

取材後記

安發さんは今年、研究のため日本とパリを行き来している。日本滞在中は出身地でもある鹿児島県の南九州市川辺町に6歳の長女も伴う。娘が通う小学校は同級生8人の小規模校で、近所に住む親戚がホタルを見に誘ってくれたり、上級生から縄跳びや折り紙を教えてもらったりしているそうだ。パリでは味わえない濃厚な人間関係を楽しみつつも、「家族や近隣の支え合いがない人もいることを、皆に想像してほしい」と話す。親も子も支える福祉に必要なのは、想像し共感する心だと教えられる。

（林田賢一郎）